

答辞

寒暖差の激しかった冬から日ごとに春の到来を感じる今日、私たちは卒業の日を迎えました。本日は多くの方においでいただき、卒業式が行えますことを卒業生一同お礼申し上げます。

大きな期待と少しの不安を抱き、入学式に臨んだ日が、ついこの間のこのようです。

中学三年のあの日。「皆で甲子園に行こう」と誓い合った帰り道のことを鮮明に覚えています。あれから三年。抱いた夢が現実となりました。

二〇二一年春、小学校からの仲間に加え、同じ志を持って川之江に来た寮生と、野球部の第一歩を踏み出しました。初めは、これまでとは違う緊張感のある独特の練習の雰囲気圧倒されていました。練習にも慣れてきた頃、新型コロナウイルス感染症の拡大が私たちの日常を奪いました。無言での練習、練習すら休止など、苦しい日々が続きました。大声でグラウンドを駆け巡っていた日常が当たり前ではなかったことを実感しました。

自分たちの新チーム。私は主将を任せられました。秋の大会は準々決勝で敗戦。力不足を痛感しました。試合後、皆で一つの目標、「甲子園で校歌を歌う」を決めました。冬の寒さの中、何千何万とバットを振り、何百本と走った八将神の石段。そんな日々が私たちを成長させてくれました。

迎えたラストシーズン。努力の成果が出始めていました。技術面では確かに向上しているのに、試合での惜敗が続いていました。ある日の練習後、監督から「心が通いあっていない。」と言われました。心に突き刺さる言葉でした。それからの私たちは常に互いの声掛けに目をあわせて応え、一つのプレーに全員が関わることを意識し、練習や試合に臨みました。活気が出て、試合でも流れを変える力が生まれました。大会直前、私たちにとって最後のベンチ入りメンバーの発表がありました。全員で戦いたい。しかし、同期全員のベンチ入りは叶いませんでした。悔しさをこらえて「一番のサポートをする」と言ってくれた時に流した皆の涙。まさしく心が通い合った瞬間でした。二年ぶりの準決勝進出。相手は強豪校でした。しかし私たちには劣勢でも折れない強さがありました。最終回の逆転は、三年生の意地を感じました。十一年ぶりの決勝戦。秋に敗れた相手へのリベンジでした。逆転の打球がフェアグラウンドに落ちた瞬間、ベンチを飛び出し、皆で抱き合いました。三時間十二分の激闘を制し、二十一年ぶりに愛媛の頂点に辿り着きました。愛媛一のサポートメンバーとベンチメンバーで私たちは愛媛一のチームになりました。スタンドの皆と一緒に歌った校歌は格別でした。優勝旗を手にした時、川之江高校を誇らしく感じました。監督の誕生日に皆で贈った「川之江から甲子園」と書かれた切符の形の

ケーキは本当の甲子園への切符となり、遅くまで指導して下さった方々への最高の恩返しになりました。

それからの日々は全てが夢のようでした。新しいデザインのユニフォームで、優勝旗を持って入場行進をした時の目の前に広がった満員の観客と芝生の緑は一生忘れません。試合前、スコアボードに刻まれた「川之江」の文字と紫色に染まったアルプスの光景を目に焼き付けました。憧れの甲子園で試合をした二時間二十八分は今でもその一瞬一瞬が頭に蘇ります。特に七回の一挙三得点奪取は今年のチームの勢いを象徴していました。ベンチとアルプスが一体となって盛り上がり、「まだいける」と皆が信じていました。最後まで諦めていませんでしたが、反撃も及びませんでした。「校歌を歌う」という目標には一步届きませんでした。とても幸せな時間でした。自分たちの努力で掴み取った甲子園出場は一生の財産です。

この夏は、父と共に戦った夏でもありました。野球好きの父は中学二年の冬に天国へ旅立ちました。試合の時はポケットに父がいつも身に着けていた数珠を入れていました。甲子園では、鞆の中に写真も入れてベンチで共に戦いました。一緒に戦ってくれてありがとう。父を甲子園に連れて行けてよかったです。

これほど素晴らしい夏になったのは、私たちだけの力ではありません。奇跡のような結果は、大声援の後押しがあったからです。炎天下、チーム「川之江」として共に戦ってくれた生徒の皆さん、先生方、保護者の方々、先輩方、市民の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

最初は不安で仕方なかった主将の役目。自信のなさゆえに、主将を外された時期もありました。その時は悔しくて一人で涙しました。しかし、そこから私は変わりました。変わったのは私を信じ、励ましてくれた同期の支えがあったからです。引退後、皆と野球ができない寂しさを感じた時、これまでがどれだけ充実していたかを思い知りました。心の底から信じ合い、笑い合い、泣き合える仲間との出会いに感謝してもしきれません。この三年間で私は「目標に向かって本気で努力する素晴らしさ」に気づきました。また、多くの困難を乗り越えて本当の「愉しさ」が分かりました。最高の三年間を本当にありがとう。

私は将来、高校の教師となって高校野球に携わりたいと考えています。達成できなかった「甲子園で校歌を歌う」の目標を追い続け、必ず達成します。

高校生活を彩ったのは多くの学校行事でした。二年生では、二度の延期の末、先生方のご尽力もあり東京と北海道へ修学旅行に行くことができました。野球部の同期生と東京へ行き、日常を忘れて思い切り楽しみました。一番の思い出は三年生の体育祭です。夏休みから勉強と両立させながら応援合戦の演技を完成させました。その裏で衣装作りに徹してくれたクラスメイトの存在も忘れてはなりません。当日、グラウンドに響く声と太鼓の音の迫力は増し、どの団の

演技も圧巻でした。終了後演技を讃える拍手がグラウンド中自然と沸き起こりました。やり切った達成感と最高の演技ができた満足感で皆の笑顔はとても輝いていました。

卒業生の皆と過ごした何気ない日々のひと時も私にとっては大切なものです。コロナ禍で始まった高校生活。いつしかマスクが無くなり、皆の笑顔が増えました。「おはよう」「お疲れ」と明るい声が飛び交う教室。たわいない会話が盛り上がった休み時間。黙食から解放され、皆で向かい合って食べたお弁当。精神的に苦しい時も、学校に行けば楽しい仲間がいました。自然と笑みがこぼれ、自然と涙が出る。そんな思い出の詰まった三年間だったからこそ、今は未来への期待より、皆と離れる寂しさが勝ってしまいます。これからもずっと大切にしたい繋がりを築けました。この絆と卒業生一六八人と過ごした日々を今後の人生の糧として皆がそれぞれの場所で輝けますように。そして、また笑顔で会いましょう。

学年主任の森實先生を始めとする学年の先生方。仲が良く明るい先生方から沢山の愛情をもらい、私たちは成長できました。一緒に笑った日、叱られた日、泣き合った日、どんな時も私たちに寄り添ってくれる心強い存在でした。三年間本当にお世話になりました。

保護者の皆様。私たちがこの日を迎えられるのは家族のおかげです。これまで多くの心配や苦勞をかけたと思います。時にはぶつかる事もあったでしょう。言葉にするのは照れ臭いけれど今日は言葉で伝えます。母さん、毎朝、早くからお弁当を作り、夜遅くまで帰りを待っていてくれてありがとう。試合の時にはカメラを持って球場まで駆けつけてくれたね。写真を撮っている時の母さんはとても楽しそうでした。これまで注いでくれた愛情、立派になって恩返しします。十八年間支え続けてくれてありがとう。

在校生の皆さん。残りの日々は想像以上に早く過ぎ去ります。戻りたいと思っても戻れません。だからこそ、大好きな友とこれからの一瞬一瞬を本気で学び、楽しんでください。野球部の後輩の皆。夏、優勝旗を持って堂々と行進している姿を楽しみにしています。

川之江高校で過ごした大切な思い出と感謝の気持ちを心に刻み、私たちは新たな一步を踏み出していきます。

令和六年三月一日

卒業生代表 鈴木 愛矢